

「ガン」の根本の原因は何か

直接原因は細胞の核を破壊する活性酸素でした。では根本の原因は何でしょうか。

宇宙法則の二大法則は「陰陽の法則」と「因果の法則」です。その他「循環の法則」とか「カルマの法則」とか「作用反作用の法則」とかいろいろありますが、特に二大法則は絶対項です。因果の法則とは「原因があつて結果がある」ということです。物事には何か現象があつたなら必ず結果があるのです。ガンが出来るのは、その意味からすれば必ず原因があつて出来ます。直接の原因は活性酸素が細胞核を破壊したことでしょう（先述）。しかしその活性酸素の侵入はどこから来たのでしょうか？

つまり活性酸素を出現させる物質です。またルローやアキャンソサイトを作る原因です。最近では次のようなことが大元の原因と言われ始めました。

「病気の根本原因」

◎食事の内容の悪さと量

◎タバコ

◎ライフスタイルの悪さ

も及ぶ中国での壮大な疫学調査やネズミを使った実験の結果を発表しました。この壮大な本は日本では後年「チャイナ・スタディ（第二のマグババン報告）グスコー出版」として出版され話題を呼びました。そのチャイナ・スタディの中で、キャンベル先生は、次のように述べました。「史上最悪の発ガン物質は動物性タンパク質だった！」と。もちろん、こう断言するからには根拠があります。

「史上最大の疫学調査 『チャイナ・スタディ』」

キャンベル先生は、動物性タンパク質の過剰摂取がどれだけ体に悪いか！発ガンするか、心臓病その他の病気になるか、を疫学調査（主に中国で）とネズミの数々の実験で動物性タンパク質の驚くべき毒性を見つけたのでした。このチャイナ・スタディ（またはチャイナ・ヘルス・スタディ）は、1983年頃から開始され1994年頃終了した疫学調査です（実質は7年）。T・コリン・キャンベル博士が中心となりコーネル大学のスタッフとオックスフォード大と中国医療科学研究院、中国衛生部などが合同で調査を行ったのですが、

◎電磁波

◎その他

かようなことは最初に述べたイギリスのリチャード・ドール博士らの報告やハーバード大学の報告でも明らかです。では食事の内容の何が悪いのでしょうか？
おおむね次が大原因です。

「ガンになりやすい食生活（+喫煙）」

1. 動物性食品（肉、鶏卵、魚、加工肉）の食べ過ぎ
2. 乳脂製品（牛乳、チーズ）の過飲過食
3. 甘い食物
（和・洋・スナック菓子、氷菓子、チョコレール他、直接食べる白砂糖、グラニュー糖、甘い飲料、メープルシロップ他）
4. 悪い油脂（トランス型油、酸化油、リノール酸油の過食）
5. 糖化（AGE）食の過剰摂取
6. 加熱オンリー食
7. 過食
8. ヘビースモーカー（喫煙）
9. 酵素阻害剤の過食（特に生の種と重金属

その規模の大きさから史上最大の疫学調査といわれました。この疫学調査が発表された後にニューヨークタイムズ紙は「疫学調査のグランプリ」と褒め称えました。

またハーバード大学の栄養学の名誉教授マーク・ヘグステッド教授も「これまで試みられた食事と進行性の疾病の関係を探る研究の中で最も包括的な研究だ」と述べました。ここまで称賛された「チャイナ・スタディ」とは具体的にはどんな内容だったのでしょうか？このプロジェクトの統計分析を担当したのは世界的統計学者であるリチャード・ピート氏でした。彼の統計分析での主な発見は、「脂肪や動物性食品の消費が最も少ない人々はいくつかの慢性的疾病や急性病の発生率が著しく低い」としたことでした。
具体的な疫学調査は主に中国で行われました（それ故チャイナ・スタディと名付けられました）。

「中国の疫学調査」

「1990年頃まで米国人の男性は、田舎に住む中国人男性と比較して心臓麻痺（心筋梗塞など）で死ぬ率が17倍も多かった」こと

とクスリ他）

（1〜9の解説は後で詳述）

「ガンになるライフスタイル」と環境

ガンになりやすいライフスタイルもありません。次がおおむねそうです。

1. 夜食
2. 食べてすぐ眠ることが続く生活
3. 朝食の過食
4. 間食の砂糖菓子と間食そのもの
5. 運動不足とハード過ぎる運動
6. 日光に当たらない生活
7. 昼夜逆転生活
8. 電磁波の中の生活
9. 超ストレス生活

「病気（ガン）を出現させる 最大の因子（大元の原因）について」

1981年イギリスのリチャード・ドール博士らはガンの原因の35%が食物、タバコ（喫煙）が30%、後は細かい原因として発表しました（前述）。1993年頃、コーネル大学教授のT・コリン・キャンベル博士は10年に

を明らかにしました。

米国人男性の方が、中国人男性よりも心臓病死が17倍も多かったことは

驚異のデータでしたが、その理由としては、キャンベル博士は動物性タンパク質の摂取量の多さと摂取割合の多さに答えを見出しました。すなわち、「米国人男性のタンパク質摂取量は彼らが1日で食べる総摂取量（総カロリー）の約18〜20%と大変に多く、かつ動物性タンパク質摂取量がそのうちの80%以上も占めていた」のです。一方「中国人の男性は、タンパク質摂取量はせいぜい10%前後と少なく、しかもそのうちの90%は植物性タンパク質（大豆タンパク質が主）」でありました。いかに動物性タンパク質が心臓に悪いかがここで明らかになったのです。一方で、キャンベル博士らはネズミを用いて実験を行いました。

このネズミの実験も極めて画期的でした。

「ネズミの実験」

カゼイン（牛乳やチーズにほとんど占めるタンパク質）をネズミの餌に入れた実験結果